おかまの唄

小川未明

青空文庫

松林で、聞きなれた鳥の声がしました。窓をあけると、やまがらやしじゅうからが、枝から枝をつたって鳴いていました。

「僕のにがしたやまがらではないかな。」

少年が、じっとその姿を見ていました。遠い町で逃がしたのが、どうして、ここまで飛んでこられよう、と思いました。

戦争のさいちゅうで、もし家が焼けたら、かごの中の鳥がかわいそうだといって、自分はかわいいやまがらを逃がしたし、友だちも、おなじ日に、べにすずめを逃がしたのでした。

「君のべにすずめは、南の国へ飛んでいくし、僕のやまがらは、北のふるさとへ帰るだろう。」

二人はよろこんで、飛んでいった小鳥を見送ったのでした。

少年は、それからまもなく、お祖父さん、お祖母さんのすんでいられる田舎へ、疎開しました。この古いお家で、お父さんが子供のとき、本を読んだり、字を書いたりなさったのだろう。またお祖父さんは、

「これから、いろいろの鳥が、裏の林へくる。雪が降ると、山鳥もうさぎもくる。そうしたら、捕ってやるぞ。」といわれました。

青々とした木々の葉が、いつのまにか、みごとに赤く、黄色くいろづきました。すこしはなれた畑には、かきの実がたくさんなっていたし、あちらの垣根のすみには、山茶花が、しめった地面の上に散って、いちめん、貝がらをしいたようでした。

小鳥たちがいなくなったと思うと、さあっと、風が林をかける音がして、つづいて、パラパラと、なにかの木の実が落ちる小さな音がしました。

「どんぐりかしらん?」

ひとりごとをいって、少年は頭をかしげていました。田舎へきてから、友だちが少ないのでさびしかった。そんなとき、東京がこいしくなるのでした。けれど、いつもお祖父さんが、

「雪が降ると、スキーはできるし、また、きじの子やうさぎを打ってやるから、来年の春まで、こっちにいるがいい。」と、おっしゃると、その気になるのでした。お祖母さんまで、

「お正月がくれば、おまえのすきなおもちをついてやるし、甘酒もこしらえてやる。」と、おっしゃるのでした。

なんで少年は、うれしくないことがありましょう。そればかりではなく、せっかくしたしくなった村の学校のお友だちとも、わかれたくなかったのです。それであるから、

「僕、すっかりなれてしまった。」と、元気よく答えるのでした。

「ほんとうか。それなら、いっそこっちの子になるか。」と、お祖父さんは、にこにこしながらいわれました。

「いいけど、さびしいんだもの。」

これは、いつわらぬ少年の心のうちでありました。生まれたときから、明るい空、いつも花の咲いている景色しか知らないのが、まったく、ちがった自然に接したからでした。

海を見れば、青ぐろい色をして、波の底には、どんなものがすんでいるだろうかと思われ、高い山を見れば、山の向こうにも町があって、人や馬が歩いているだろう、と考えさせられるのでした。

急に、耳をすました少年は、

「いまじぶん、雷が……。」と、おどろきながら、二階へ上がって、空を見まわしました。

海の方は、いつものように暗く、おどる波だけが白かった。屋根の上には、灰色、きつね色、だいだい色、さまざまの雲が、かさなりあっていた。そのため、日はかげっていたけれど、雲の切れめから深い穴をのぞくように、青い空が見えました。

「おじいさん、おそろしい絵を見るような景色ですね。」

少年は走りよって、お祖父さんにたずねました。

「こちらは、これからいつもこんな空模様だ。」と、お祖父さんは、気になされませんでした。

あまり遠いので、そのうち、雷の音は下までとどかなかったが、青白いいなびかりのひらめくたびに、雲の峰々を、浮きだすようにてらしました。

たまたま、金色の日の光が、もれてくることもありました。それを見ると、天の上は、いつまでもかわらぬ、おだやかなところであるけれど、下は、雲がみだれて、戦争がつづけられているような気がしました。

少年は、よくできた飛行機に乗って、雲の上へ飛んでいきたくなりました。

夕飯のあとは、お祖父さん、お祖母さん、少年の三人が、いろりのはたで枯れ枝や松葉をたき、毎晩のように楽しくお話をしました。

やがて少年は、床へはいって、お父さんや、お母さんのことを思い出しながら、ねむってしまいました。

あくる朝、目をさますと、お祖母さんは、とっくに起きて、お勝手ではたらいていられました。かまどに火がもえ、ぴかぴか光るおかまから、白い湯気が立ち上っていました。あとから、あとから追いかけては消えてなくなる湯気を見ていると、そのうちに、ぷつぷつと、勢いよく吹き出して、重いふたを動かしました。

「おばあさん、おかまがおこって、小言をいっているのだね。」と、少年は、床の中でいいました。

「よくたけたといって、よろこんでいるのだよ。」と、お祖母さんは笑われました。

「おもしろいな。」

「おまえのお父さんも、小さいじぶん、よくそういって、このおかまの唄をお聞きなさったのをおぼえている。」と、お祖母さんはいわれました。

少年が、昔からこのおうちでくりかえされるおかまの唄を、とうとく思って聞きました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「僕の通るみち」南北書園
　　1947（昭和22）年2月
初出：「良い子の友」
　　1945（昭和20）年10月
※表題は底本では、「おかまの唄《うた》」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2020年1月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おかまの唄

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/